

「コラ、物取りとは何んぢやえ」

「物取りと云ふたが誤りか、私もこれ丈けの家に奉公して居る番頭ぢや、高が二十五兩や三十兩の金に目をくれると思ふか、見誤つたか騙りめツ、親爺と云ひ合はして商賣人の店先を騒がして押騙り強取り奴……」

「コラ番頭」

「何んぢや」

「汝ア甚い洒落た事を云ふな、騙りとは何ぢや、コリヤよう聞けよ、櫓濱で正直と渾名を取つた船頭の幸兵衛を押騙り強取とは何んぢや」

「サア聞いた事があるのなら何んで親爺が店を出た時に這入つて來んのぢや、雁も鳩もたつてから、親爺が戻つてから争ふて居る中へ、大聲揚げて商賣人の表を騒がす故に、押騙り強取と云ふたらどうした」

「ナニ、生意氣な事を云ふな」

「マア、お待ちなさつて下さりませ、貴方様は何處のお方か存じませんが、御親切に有難う存じます、お腹も立ちませうが、今も聞いて居ますれば此のお酒屋さんのお店先をば騒がした押騙り強取と見られました、此方の失敗りモウ無ければならぬ金子でござりますが、私に備はらぬ金子

と斷念あきらめしました、拾ふてなさらにヤア仕方がござりません、放つておいておくれやす」

「拾はぬ物が返せるかへ」

「オイ親爺さん何を云ふのや、こんな事を云はれて黙つて居られるかい」

「イ、エ、商賣人の表を騒がしまして済みまへん」

「そんなら親爺さん、モウ宜いのか、肝心の落し主がそれでえいと云ふのに、俺一人頼頼たのたのに力を入れても仕方がない、やい番頭、人を捉まへて宜うも騙りと吐したな、俺の面を覺へて居ろ、今にどうするか見て居ろ、奴盗人めツ」

「ナニツ」

二人は表へ出はしたが、久兵衛は幸兵衛に袂たもとしまして、其儘悄然と安綿橋あんわたしの最中まで参りますと黄昏、燈を點さうと云ふ時分、人通りの無いのを幸に、天王寺の方をジイツと眺めて、

「アーア婆よ、勘忍してくれよ、娘が孝心から婆の病氣を癒さうと、新町の廓へ浮川竹の勤奉公させ身を賣つて調べてくれた金子、あらう事か酒に性根を奪はれて、落すと云ふ不甲斐ない事があらうか、婆よお前の病氣は癒らぬ前表ぢや、諦めてくれよ、娘どうぞ辛からうけども二十五兩だけは勤大切と奉公して返済してくれよ、お前への申譯は今私は此處から身投げして死ぬほどに、アー婆よそちも迎も助からぬ命なら急ぐ事はないぞや、私は三途の川とやらでそちの來るのを待つて居るほ